

2022.8.21 主日礼拝

聖霊降臨節第12主日礼拝（家庭で礼拝を守る場合の式順）

黙 禱

聖 書 ペトロの手紙I3章17-22節

説 教 「イエス様を模範に」 牧師 三浦 啓

讃美歌 505「歩ませてください」

献 金

黙 禱

今日の聖書箇所17節に「神の御心によるのであれば、善を行って苦しむ方が、悪を行って苦しむよりはよい」とあります。すでにペトロの手紙I2章20節でも「善を行なって苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです」と語られてきました。私たちが召されたのはそのためだと、ペトロはそこでキリストの十字架の模範を取り上げ、そのキリストの打ち傷のゆえに、あなたがたはいやされたのですと語ったのです。すべての解決はここにあります。私たちの人生のさまざまな苦しみや悩みの解決は十字架にあるのです。なので、ペトロはイザヤ書53章から引用して、キリストの受けた傷のゆえにあなたがたは癒されたのです、と語ったのです。

そして、ペトロはここで再びキリストの模範を取り上げています。しかし、ここでは単に、善を行なって苦しみを受けるのが、悪を行なって苦しみを受けるよりよいということの模範としてではなく、キリストが悪い人々、すなわち私たちのために身代わりとなったのはどうしてなのかという、その目的なり、理由を語っているのです。それは、「肉では死に渡されましたが、霊では生きる者とされたのです」、「あなたがたを神のもとへ導くためです」とあります。これはどういふことでしょうか？ 誰に近づくよりも神様に近づくことは困難なことです。確かに、神様は私たち一人ひとりのことを大切に思い、見守ってくださる存在ですが、罪深い私たちが神様に近づくことは恐れ多いことのようにも思えます。しかし、神の子イエス・キリストが私たちの罪の身代わりとなって十字架で死んでくださったことで、その不可能なことを可能にしてくださいました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」というインマヌエルの預言が成就したのです。これ以上の喜びはありません。キリストはご自身の苦しみによってその喜びをもたらしてくださいました。それは私たちの模範であり、慰めです。私たちも、神様の御心を行って苦しみを受けることがあるかもしれませんが、そのことがわかったら力が与えられます。悪を行って苦しみを受けるよりも善を

行って苦しみを受ける方がよいのです。ペトロはこの決定的で完全な救いという事実こそが、信仰者の人生に起こる様々な不条理に対する解決であると言っているのです。

いったいなぜそのような苦しみ起こるのかわかりません。そこでペトロは 19 節から 21 節でノアの箱舟の事実によって説明を加えています。

ここは非常に難解な箇所です。いったいなぜこのようなことが書かれてあるのかわかりません。ここではイエス・キリストの苦難がクリスチャンに対する模範であり、慰めであり、究極的な解決であるということが語られているのに、「キリストは、捕らわれていた霊たちのところに行って宣教されました」とか、「この水で前もって表されたバプテスマは、今やイエス・キリストの復活によってあなたがたをも救う」ということが語られています。多くの学者は、この箇所は、後世の人が付け加えたのではないかと考えているほどです。つまり、前後の文脈との関係で書かれてあるのではなく、そうしたことは全く関係なくここに突然挿入されたと考えた方がよい、というのです。その理由もよくわかってはいません。しかし、ペトロがここでこのことを取り上げているのは、やはりそれなりに意味があったからでしょう。それは何かというと、このことを記すことによって読者たちを励まそうとしていたのではないのでしょうか。いったいこれがどういふ点で励ましになるというのでしょうか。

それは、彼らがああノアの箱舟によって救われたわずか 8 人の者たちと同じであるという点においてです。圧倒的多数の異教的な社会の中であって、本当に一握りの者たちでした。しかし、「恐れることはない」とイエス様もおっしゃられました。ルカによる福音書 12 章 32 節に「小さな群れよ。恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」とあります。まさにここで言いたかったことはこのことだったと思うのです。どのような小さな者でも、神様は守ってくださいます。それは、昔、箱舟の中で救われたノアの家族のように、です。彼らは大洪水の中を通りながらも救われ、守られました。わずか 8 人の人々が、箱舟の中であって水の中を通して救われたのです。ペトロはそれを、この不条理な人生における唯一の支えだと言いたかったのでしょう。

この「水を通る時も救われる」という言葉は、イザヤ書 43 章 2 節にも出てきます。

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。

い。」

ここで言われている「水の中」や「火の中」とは、実際に水や火の災難が降りかかるということではなく、様々な試練や困難を意味しています。そのような困難な時にも「神はあなたと共におり」「あなたは押し流されない」「炎はあなたに燃えうつらない」のです。これこそが、不条理とも思える苦難の中であって最大の支えとなり、慰めとなるのです。それほどキリストの救いは完全であり、圧倒的に大きいということです。

ところで、この話はこれで終わっていません。19節に、「霊においてキリストは、捕らわれていた霊たちのところに行って宣教されました」とあります。その霊とは、「ノアの時代に箱舟が作られていた間、神が忍耐して待っておられたのに従わなかった者です」と記されている霊のことです。これは一体どういうことなのでしょう。

この箇所は、大きく分けると三つの解釈があります。一つは、これは地上に命を与えられる前のキリストが聖霊によってノアの時代に神様を信じなかった人たちに宣教したという考えです。この解釈によると、キリストが捕らわれの霊たちのところへ行って御言葉を語ったのはノアの時代のことであり、イエス様が地上に生まれた後の出来事を言っているではありません。

二つ目の考えは、これはキリストが十字架につけられて死んだ後、復活する前に、霊において生かされて、黄泉へ下り、捕らわれている人たちに御言葉を語ったとするものです。この説によると、キリストが黄泉へ下ったことを受け入れます。そして、捕らわれの霊たちに御言葉を語られましたが、問題はその御言葉とはどのような御言葉であったのかということです。ある人たちはそれをペトロの手紙Ⅰ4章6節の御言葉との関連で福音の言葉と解釈し、ノアの時代に悔い改めなかった人々、すなわち、捕らわれた霊たちのところに行って、福音を宣べ伝えた、と言います。ということは、死んだ後でも救われるチャンスがあるということになります。このように亡くなった後で、悔い改めの機会をいただくことを神学の世界では「セカンドチャンス論」と言うのだそうです。亡くなった後でも救われるチャンスがあるという考えです。この「セカンドチャンス論」に対しては、神学者や牧師の中でも意見が分かれています。亡くなった後、天国に招かれない者にも悔い改めの機会が与えられることに希望を見出す人もいれば、“亡くなった後で悔い改めればよい”、という考えを元に地上での歩みが疎かになる危険性がある、と危険性を指摘する神学者もいます。

三つ目の考えは、キリストが十字架で死なれ、黄泉に下られ、キリストの福音を信じなかった人たち、すなわち、捕われの霊たちのところへ行って御言葉を語りましたが、その御言葉は救いの言葉ではなく、裁きの言葉であったというものです。キリストは彼らのところに下って行き、救いの勝利を宣言されたというのです。というのは、喜びの訪れを伝える場合、ギリシャ語では「ユーアンゲリゾウ」という言葉を用いますが、ここでは単に御言葉を告げ知らせるという意味の「ケリグマ」が使われているからです。そしてその後のところにキリストが復活され、天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神様の右の座に着かれたとあるのも、このことを証明していると言えます。

なので、これはキリストの勝利の宣言なのです。キリストは私たちの罪の身代わりとなって死に渡されましたが、三日目によみがえり、天に昇られ、神の右の座に着座されました。キリストは圧倒的な勝利者なのです。この栄光の主が、私たちとともにおられるなら、たとえ不条理と思えるような状況に置かれていたとしても、私たちはキリストが死から復活して神の栄光の座に着いたように、やがて神様の栄光を受け継ぐ者となるのです。

以上のようにいろいろな解釈がありますが、私たちに求められているのは、私たちがどのような状況に置かれていても、私たちの心の中でこのキリストを主としてあがめることが大切ということです。もし私たちが正しいことを行いながら、それでも批判を受けたり、攻撃を受けるとき、私たちはその時をどのように乗り越えればよいのでしょうか。確かに、自分にとってマイナスな事を言われ、不遜な態度を取られれば、恐怖や不安を感じたり、やり返したくなることもあるかもしれません。そのような時に、改めて考えたいのは、イエス様の姿勢です。イエス様が十字架へと歩まれた時、いわれのない罪のために死刑判決を受け、会衆らに誹謗中傷されても、そのネガティブな言動に対してネガティブな言動で返すことはありませんでした。むしろ、自分を攻撃する者のために十字架の上で祈るイエス様の姿がありました。そのような歩みを進めたイエス様に適う存在はいません。私たちにはそのような最高の信仰のモデルがいるのです。そのイエス様の姿勢、信仰に従う歩みを進めていきましょう。

(牧師 三浦 啓)